土の下には何がある？？　平城宮東方官衙地区の探査

継続的に発掘調査や整備が進む平城宮ですが、寧楽の都を解明し、伝える、という目的に加え、調査、保存の技術の開発や史跡の利活用の実践という課題もあります。そう、ここは実験の場でもあるのです。

発掘以外にも、遺跡の情報を知る方法はいくつかあります。奈良文化財研究所は多様な方法を模索してきました。今回は、その方法のひとつである、地中レーダーによる遺跡探査について紹介しましょう。

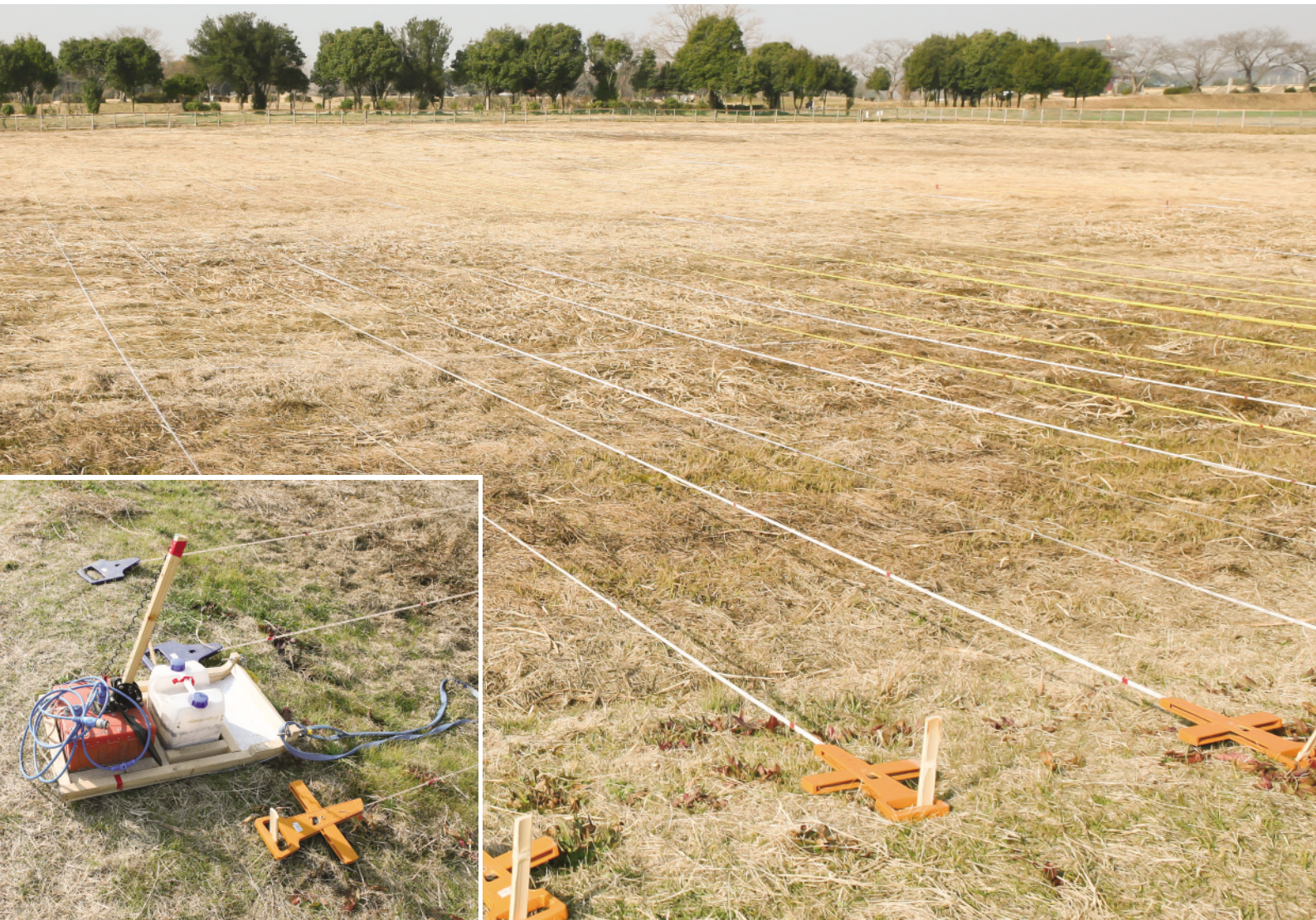
この方法は、アンテナから地中に電磁波を発信し、その反射をとらえる方法です。九州地方や関東地方では、条件が良ければ、柱穴などの存在もとらえることが可能になってきました。しかし、近畿地方の土は、手強いようで、なかなか良好な結果が出せず、未だ日々試行錯誤の連続です。

ここ数年、都城発掘調査部と連携して、探査と発掘調査を連携させる試みをおこなっています。張り巡らせた基準線に沿ってアンテナを引く作業は根気が必要です（図①）。草地、ぬかるみ、まんべんなく歩くと、現在の平城宮は一面の草地ではなく、様々な場所があることを体験することができます。勘弁して欲しいことも度々ですが・・・。

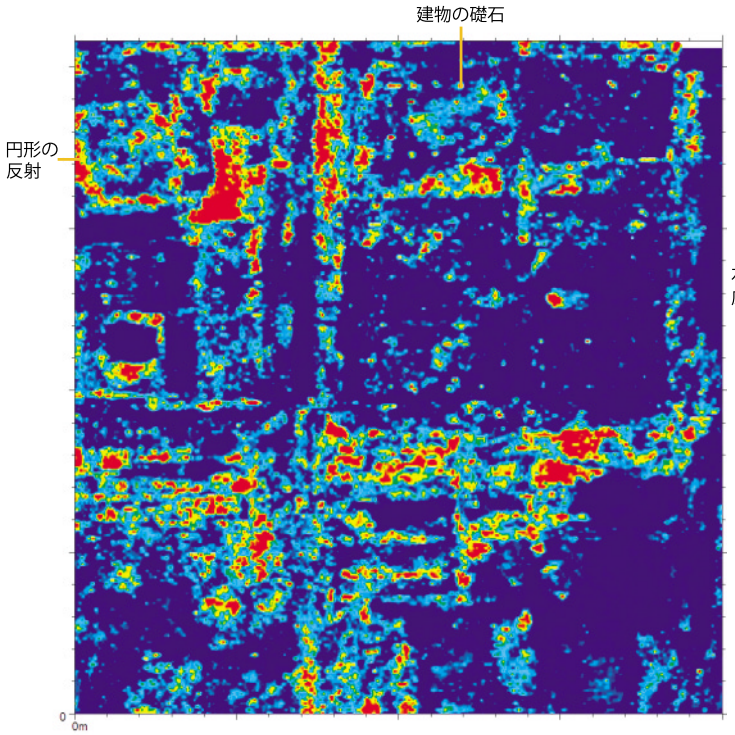
苦労の甲斐あってか、ここで取り上げる調査では良好な成果を得ることができました。ここでは、浅い部分（図③）と、やや深い部分（図④）の成果をお見せします。成果として出力した平面図東側（図②右側にあたる）には築地で囲まれた区画と門、道路、立ち並ぶ建物の礎石や柱穴、溝、といった遺構が存在しています。これらは部分的な発掘調査でその内容を明らかにすることができました。未調査の西側（図②左側にあたる）には石敷の広場？、その北側に性格も時期もわからない円形の謎の反射がうつっています。

この成果からはまだまだ色々なことがわかりそうです。じっくり見ていただいて、調査員が気付かない遺構の存在や、その性格について想像してみてください。（埋蔵文化財センター　金田 明大）

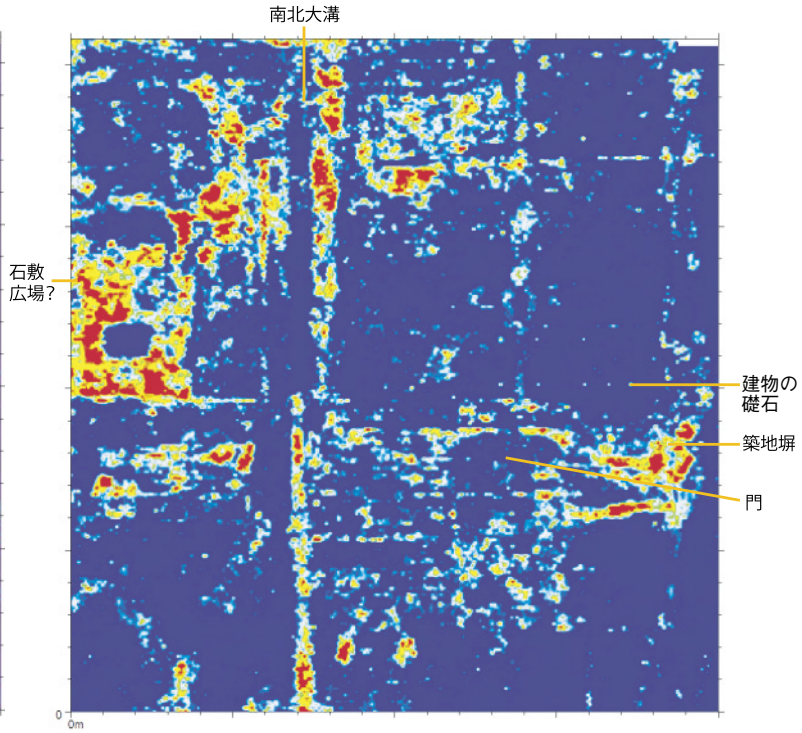
①探査のために張り巡らせた基準線と地面を這（は）わすための橇（そり）にセットした地中レーダー（左下写真）



②発掘調査で確認された遺構（平城第466次調査・東方官衙地区の調査　2010年4月）



③地中レーダーによる探査成果（やや浅い部分）



④地中レーダーによる探査成果（やや深い部分）